

人間臭い先生

2025・7・9 重枝 一郎

授業内容における知識を多くもっていれば、授業上手な先生というわけではない。生き物に例えられる授業において、即興的に展開しながら、深い洞察力をもって、その都度の状況を把握していくことを「**行為の中の省察**」と言う。私たちは、授業中に何が問題なのかを見抜くこと、そしてその対応を瞬時に決める。私は、一瞬の判断にどれだけ多くの思考を展開しているのかが大切だと思っている。一つのことだけしか考えていない場合は感情的になっていることが多い。この思考レパートリーを学び合うことは重要である。

私は以前勤めていた高校の話であるが、教科主任会で校内研究授業を提案した。その時の反発にはビックリした。ある英語科主任は「私たち英語科が国語の授業を見る必要はあるのですか」と噛みつかれた。これはその先生の個人的な考えであった。おそらく、教科の内容的に参考にならないと思ったのか、または、させられるのは嫌とか、見られるのは恥ずかしいとか、忙しくなりそうだから嫌とか・・・理由を想像した。その先生に「理由は？」と問うたら、「その時間は多くの先生が自習になる。生徒の授業時数確保の観点で・・・」と。人は「やれない理由」は0.2秒でたくさん思いつくという研究結果を思い出す。私の心の中は「かっこ悪い大人がいるな」であった。でも実際の返答は「ではそうならないようにします」と言った。以前から、私は、研究授業は極端な話、質より量とっていて、回数を増やすためにICTを活用した研修方法の実践をもっていたので普通にやれると考えた（校長研修だより112）。私は、そのことを言って、「年に1回2教科全体研究授業をする。また、同教科内で時期を決めて、教科内で授業見学を行い、“いいところさがし”の協議会をする」と決めた。

私は、「教科の内容的なことは自分で勉強できる。でも“教科をこえた指導力”については、見て盗んだり、他者の視点をもらったりしないと成長はない」と思っている。それともう一つ重要なのは「自分を客観視できる力（メタ認知）」である。だから、映像で、自身のエンターテインメント性を自分の目で見えることを大切にしている。特に表情が肝である。この「教科をこえた指導力」というのは、上に書いた「**行為の中の省察**」につながる。

教育委員会時代、年間数十回研究授業に参加し、指導助言をしなくてはならなかった。私は授業を見る時に下の3つのことに注目していた。

1つ目は、「ピントが合っているか」についてである。

「行為の中の省察」の生起を左右する要因となるのは、教室環境（座席配置、発言ルール、情報提示など）、出来事の結び付け（授業のねらい、授業過程、授業構成、教材解釈、生徒への配慮など）、生徒同士の関連付け（生徒の反応、関わり合い、人間関係など）である。全体的にちゃんとピントを合わせることができているかを見る。

2つ目は、「思考した活動をしているか」についてである。

学習活動の展開に伴って、学び合いが行われているかということである。教師の専門性は、学び合わせる専門性が重要である。その際、教室のテンションを見る。教師の声の大きさ、テンポ、間も見るが、生徒同士が響き合う感じで落ち着いて思考しているかということである。

3つ目は、「心理学的技法」についてである。

意識的でも無意識的でもいいが、主に声掛けの仕方になる。「校長研修だより 155・156」にも書いている。

私たちミッションティーチャーは、何か教科内で協働的に研修しているか。「教科をこえた指導力」について研修しているか。させられるんじゃなく、する意識か。全体の研究授業はしていないようだけど、同教科内では？ まずベテランからという意識はあるか？

私は、形式的なのは望んでいない。でも、誰かに授業している自分をビデオ撮影してもらって、自分を客観的に見ながら自評することはしてほしい。自評するとその人がどれだけのことを思考して、その中の1つを行ったかがわかる。これが「行為の中の省察」である。科会の時にでもみんなで見ればいい。（やり方は校長研修日より 112 参照）

これから「After AI」の時代になる。AI が当たり前となり、教師の世界にも変化が生まれると思われる。川島教頭からもらった資料に「どんなに AI が発達しようとも生き残る先生とは」というものがあつた。

1つ目は、「クリエイティブな先生」である。ただ知識をしゃべるのではなく、生徒に驚きやインパクトを与えられる授業展開は必要不可欠だからである。

2つ目は、「生徒の人間力を向上させることができる先生」である。愛は本当の意味で AI はもつことはできない。生徒の心の成長を手助けできるのは人間だけである。教師という仕事は、人間味のある仕事といえる。

3つ目は、「生徒の個性を見出せる先生」である。生徒は一日の大半を学校で過ごす。大勢の生徒たちの比較の中で、その生徒の尖った部分を見つけやすいからである。

そして、一番の生き残る先生は、「レジリエンスを育む先生」である。生徒のしなやかで折れない心（レジリエンス）をタイミングという武器を駆使し、生徒との関わりの中で育てていく。しなやかで折れない心（レジリエンス）は、忍耐力とつながる。もう何回書いたかわからないくらい言っているが、忍耐が継続しなければ結果は出ない。そして、忍耐力は心の寛容な人の中で育つ。

生徒のレジリエンスを高めて、気持ちよく忍耐力を継続させたい。そして私たちは「人間臭くあれ」。

《《NEWS》》 大学図書館（梶原室長）からの情報

「福岡女学院中高生の大学図書館利用者が【激増】」とのこと。

5月に福岡女学院中高生の図書館利用時間の延長をした。この4月～6月の3カ月間の入館者数を前年度の数字と比較した。なんと、前年度比【488名・65%】の増加となっている。（注）下表の数字は、延べ人数。

学年	2024年度	2025年度
J1	3	112
J2	21	34
J3	140	93
中学全体	164	239 (+75)
S1	250	411
S2	86	253
S3	225	312
M1	0	9
M2	2	6
M3	15	0
高校全体	578	991 (+413)
中高全体	742	1230 (+488)